

演習・研究協議(15:00~16:20)

子どもの思いや願いを踏まえた授業づくり

助言者

大田区立松仙小学校教諭 松村 英治 氏
大分県教育庁義務教育課 後藤 竜太

1

小学校学習指導要領 第1章 総則

第2 教育課程の編成 3 教育課程の編成における共通の事項

(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項

各学校においては、次の事項に配慮しながら、学校の創意工夫を生かし、全体として、調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。

ア 各教科等の指導内容については、(1)のアを踏まえつつ、**単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加え**、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすること。

イ **各教科等及び各学年相互間の関連を図り**、系統的、発展的な指導ができるようにすること。

ウ 学年の内容を2学年まとめて示した教科及び外国語活動については、**当該学年間を見通して**、児童や学校、地域の実態に応じ、児童の発達の段階を考慮しつつ、効果的、段階的に指導するようにすること。

エ 児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、児童の発達の段階や指導内容の関連性等を踏まえつつ、**合科的・関連的な指導を進める**こと。²

第3 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

知識及び技能の習得

思考力、判断力、表現力等の育成

学びに向かう力、人間性等の涵養

(1) 第1の3の(1) から(3) までに示すことが偏りなく実現されるよう、**単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。**

特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。



生活科
「年間や、単元など内容や時間の…」

学習指導要領 第2章 各教科
第3 指導計画の作成と内容の取扱い

3

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- ① **学ぶことに興味や関心を持ち**、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、**見通し**をもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を**振り返って次につなげる「主体的な学び」**が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、**自己の考えを広げ深める「対話的な学び」**が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、**知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする**ことに向かう**「深い学び」**が実現できているかという視点。

4



新大分スタンダード

新大分スタンダードで
主体的・対話的で深い学びを実現!

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力を育成するワンランク上の授業

1 1時間完結型

「主体的な学び」を促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2 板書の構造化

*思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3 習熟の程度に応じた指導

- *「**具体的な評価規準**」に基づく確かな見取り
- *「**努力を要する状況**」の児童生徒に対する手立ての工夫



4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

安心して学べる「学びに向かう学習集団」

主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を創造する学習展開

*各教科等の見方・考え方を働かせて展開する

「**課題設定**→**情報収集**→**整理・分析**→**まとめ・表現・交流**→**振り返り・評価**」等の学習過程の繰り返しの中で行われる

- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

H30.3月版

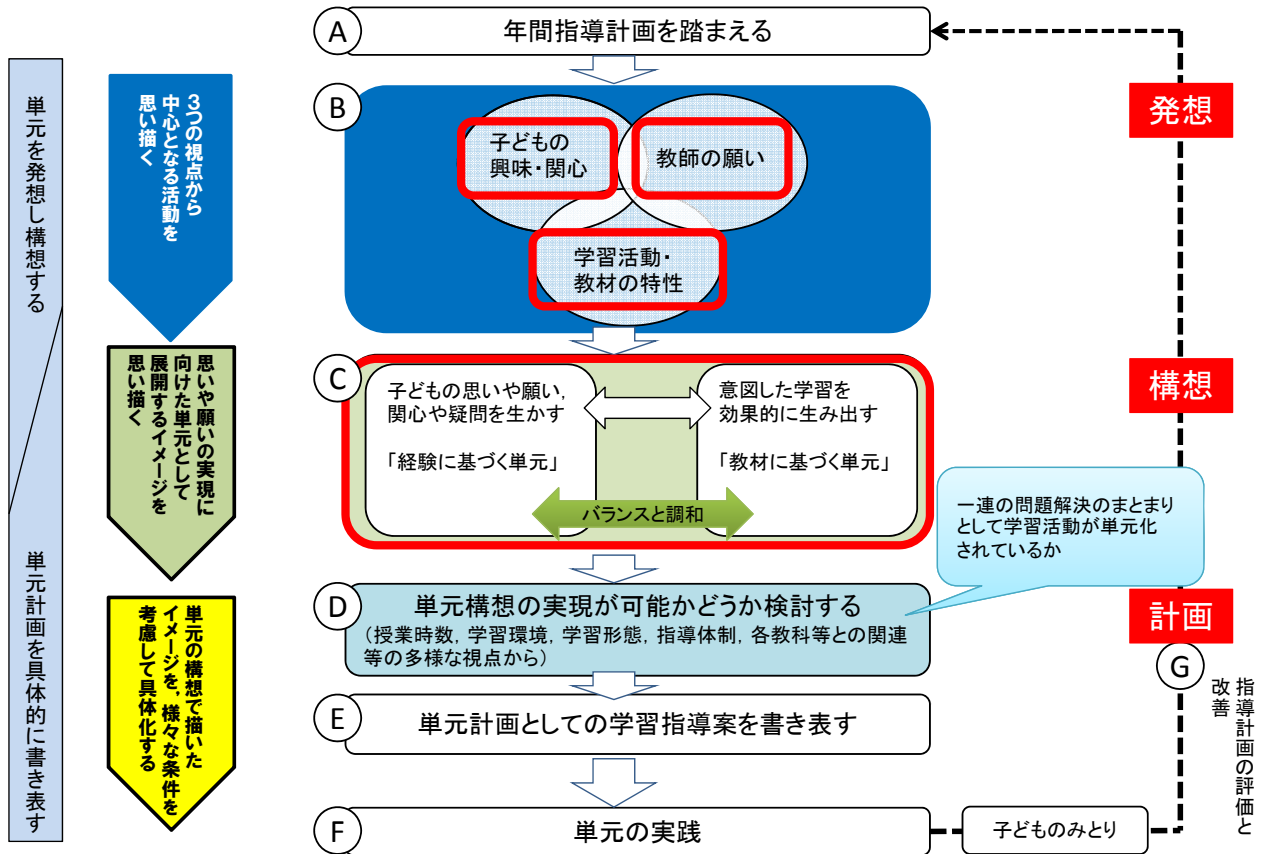
単元について H28. 12. 21中教審答申から

単元とは、各教科等において、一定の目標や主題を中心として組織された**学習内容の有機的な一まとまり**のことであり、**単元の構成は、教育課程編成の一環**として行われる。

教科書を含む教材の章立て等も、こうした単元の構成をイメージしながら構成されている。また、単元ではなく題材といった呼び方をする場合や、単元の内容のまとまりの大きさに応じて、大単元、小単元といった呼び方を用いる場合等もある。

従来、単元については、**実生活に起こる問題を解決する経験のまとまりを内容とする経験単元**と、**科学・学問の基礎を子供の発達過程に即して体系的に教えようとする教材単元**という二つの考え方が提起されてきた。

現在、各学校において実施されている単元については、**各教科等の系統的な内容を扱いつつ、その中での学習のまとまりを子供にとって意味のある学びとしようとする様々な工夫が展開**されており、今回改訂の議論は、こうした工夫を後押ししようとするものである。



カリキュラムマネジメントの3つの側面

① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

カリキュラム・デザイン

② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

PDCAサイクルの確立

③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

内外の教育資源の活用

単元・学習過程のイメージ

生活科
国語科
算数科

生活科の単元構想イメージ

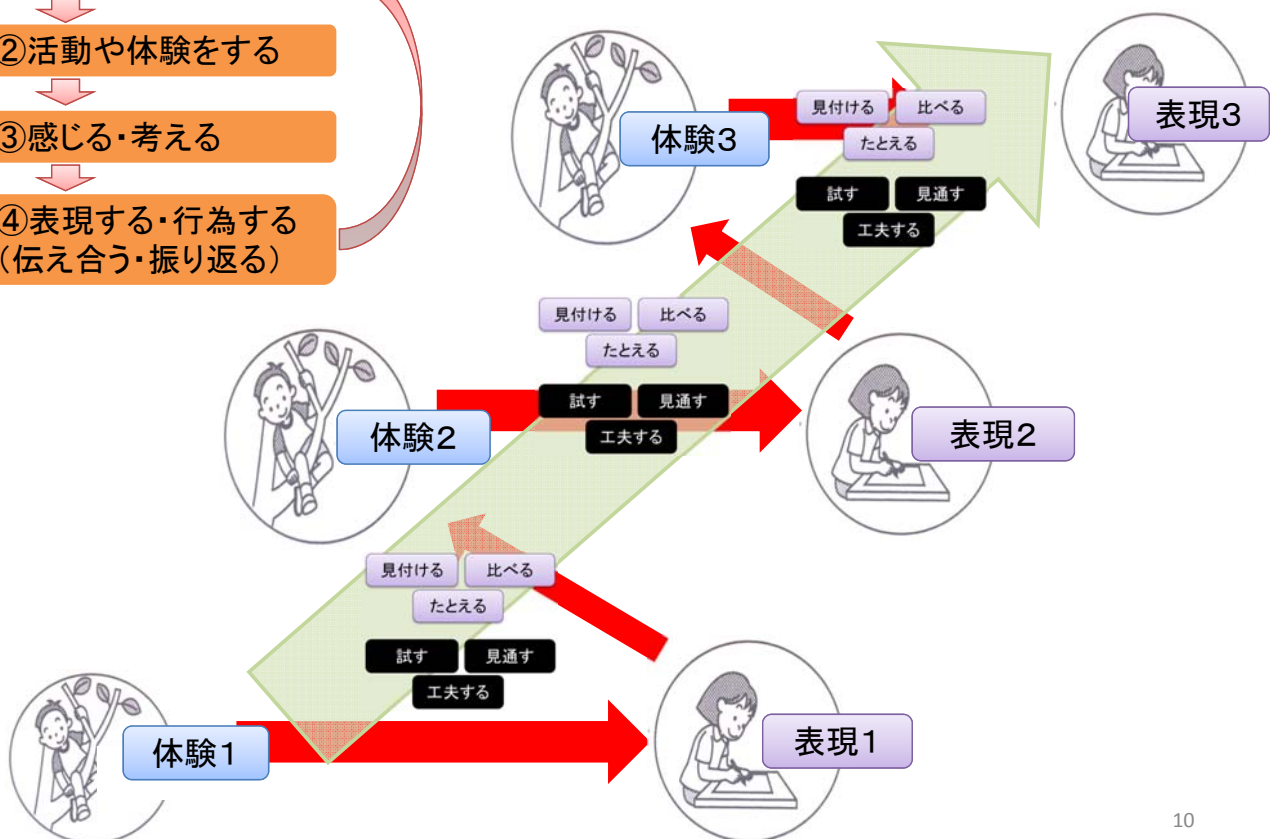
① 思いや願いをもつ

② 活動や体験をする

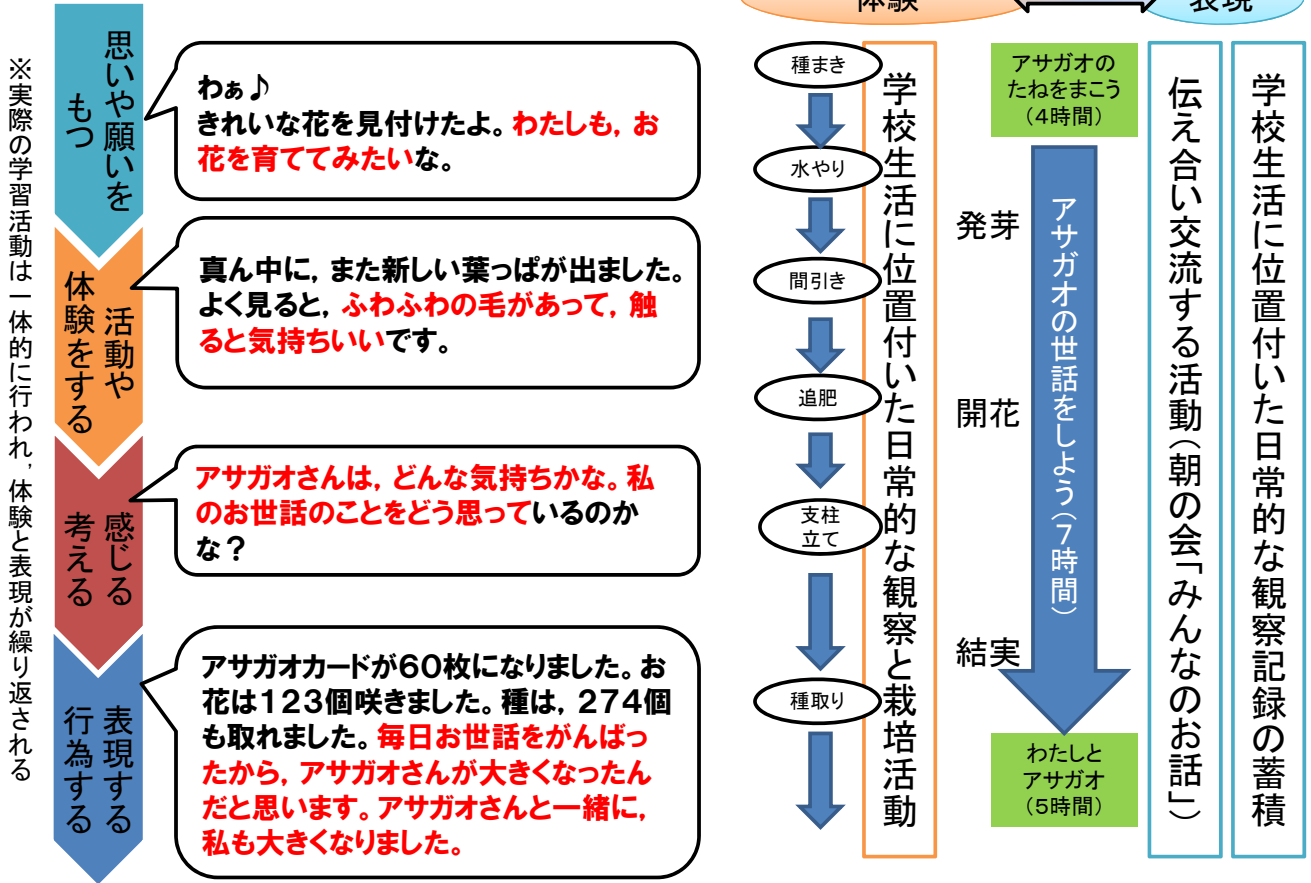
③ 感じる・考える

④ 表現する・行為する
(伝え合う・振り返る)

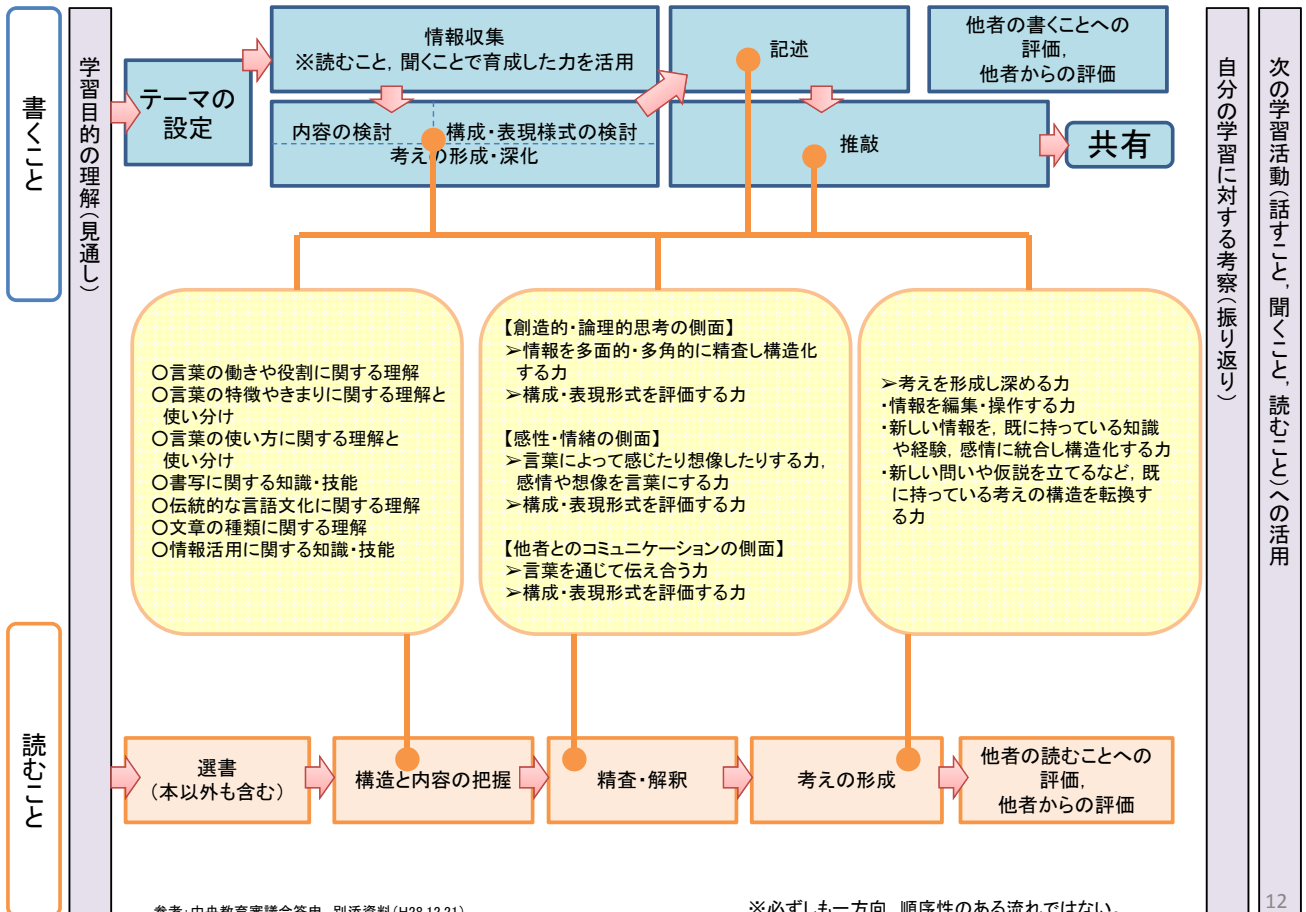
※必ずしも一方向、順序性のある流れではない。

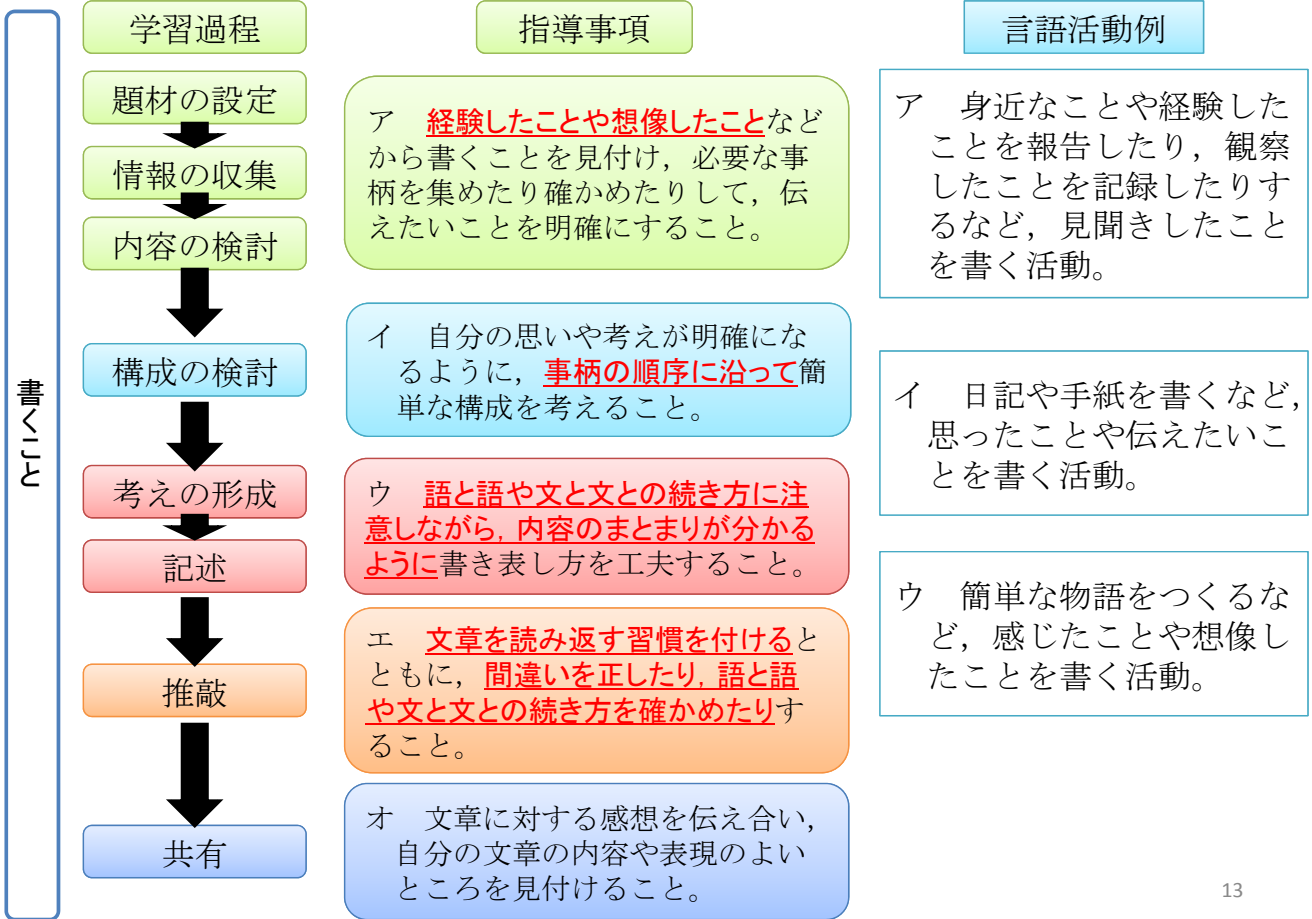


生活科における学習のプロセスイメージ(例)



国語科における学習過程のイメージ





国語科の単元イメージ(例)

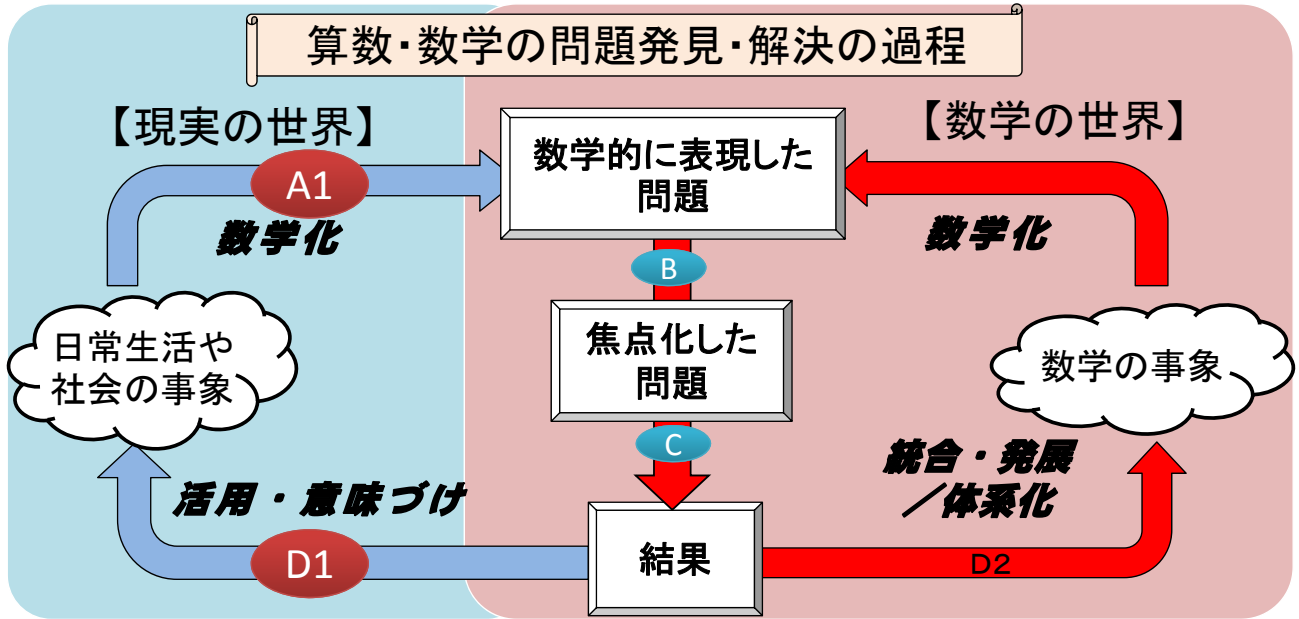
(第4学年「調べてわかったことを発表しよう」(教育出版))「話すこと・聞くこと」

構造と内容の把握 精査・解釈		振り返り	表現と共有	共有	考えの形成	構成の検討	内容の検討	情報の収集	話題の設定	時		
		単元の学習を振り返る。	「防災の大切さ発表会」を聞く。	発表会の計画と準備	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	ポスターセッションを高める。 お家さんに見てもらおう!!	学習すること これからの学習の見過しを セツ。 ポスターセッションに向け たじ、んべ 何を伝えたいかな? 情報を集める。(足りない分 伝えたいことの中心は? 調べるぞ!! ポスターの内容を考える。 (構成) わかりやすく伝える ポスターの構成を考える。 おせんを動かして 決定!! ポスターを作る。 語(説明)の筋道を考えて...	日にち 1/23 1/24 1/25 1/26 1/27 1/30

- ①子どもの学習経験や、興味・関心を踏まえる。
- ②指導事項を確認する。
- ③「やってみたい!」と子どもが思いや願いをもつ導入を工夫する。
- ④学習活動を構想する。

算数・数学の学習過程のイメージ

算数・数学の問題発見・解決の過程



日常生活や社会の事象を数理的に捉え、
数学的に処理し、問題を解決することができる。

数学の事象について統合的・発展的に
考え、問題を解決することができる。

事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決することができる。

※各場面で、言語活動を充実

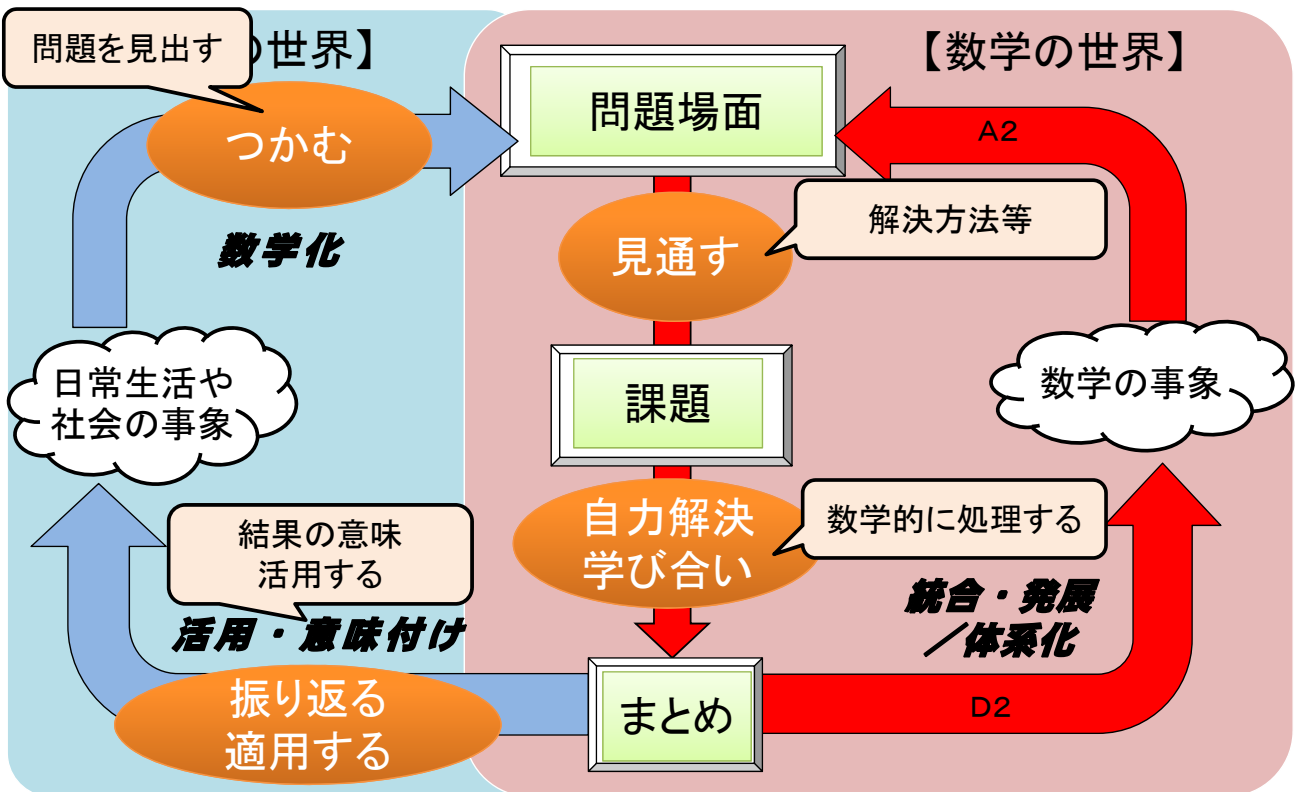
※これらの過程は、自立的に、時に協働的に行い、それぞれに主体的に取り組めるようにする。

※それぞれの過程を振り返り、評価・改善することができるようにする。

中央教育審議会答申 別添資料(H28.12.21)

15

事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する



日常生活や社会の事象を数理的に捉え、
数学的に処理し、問題を解決することができる。

数学の事象について統合的・発展的に
考え、問題を解決することができる。

16

【これまでの学習経験等】

- 家庭、幼稚園、保育園などの生活経験や遊びの活動において、身の周りにあるものの量に触れてきている。
- その大きさについては、使う目的に合わせて選んだり調節したりする経験を積んできている。
- 身の周りにあるものの量についての経験は、直感的に行われていることが多い。
- 量の意味、大小を表す言葉の理解、量の比較方法や大小判断の根拠、違いの大きさまでは意識されていない。

A 算数への関心・意欲・態度	B 数学的な考え方	C 数量や図形についての技能	D 数量や図形についての知識・理解
①身の周りにあるものの長さ、面積、体積に関心を持ち、その大きさを比較しようとしている。 ②大きさを直接比較できないものが、媒介物を用いると間接的に比較できるようになるよさに気付いている。 ③身の周りにあるものの大きさを、適当な媒介物の大きさを単位として用いて、その大きさのいくつ分かで数値化して測定すると比較できるようになるよさに気付いている。	①身の周りにあるものの長さ、面積、体積について、媒介物を用いて間接的に比較したり、適当な媒介物の大きさを単位として用いて、その大きさのいくつ分かで数値化したりするなどの比べ方を考えている。	①身の周りにあるものの長さ、面積、体積を、直接的に比べたり、媒介物を用いて間接的に比べたりしている。 ②身の周りにあるものの長さ、面積、体積を、適当な媒介物の大きさを単位として用いて、その大きさのいくつ分かで数値化して測定することで比べている。	①長さ、面積(広さ)、体積(かさ)の意味を理解している。 ②長さ、面積、体積を、適当な媒介物の大きさを単位として用いて、その大きさのいくつ分かで数値化して測定すると比較できることを理解している。 ③長さ、面積、体積などの量の大きさについて豊かな感覚をもち、大小を捉えて大小を表す言葉で表現している。

長さ・面積・体積の各時において様々な素材(具体物)を実際に比べたり測定したりして、それぞれの量について実感をもつ(量感を豊かにする)ことができるようにしていきたい。

直接比較

間接比較

任意単位(測定)

17

指導と評価の計画(例)

時	ねらい・学習活動	評価規準
1	「長さ」の意味を理解し、直接比較で比べて長短判断ができる。 真っ直ぐに伸ばし、一方の端をそろえ、反対側の端で長短の判断をする。	C-① A-①
2	媒介物に写し取って間接比較で長短判断ができる。 動かせないものの長さを写し取って比べ、長短の判断をする。	B-① A-②
3	長さを任意単位で測定して、長短判断をすることができる。 適当な長さを単位として、そのいくつ分かで数値化して長短の判断をする。	D-② A-③
4	「広さ」の意味を理解し、直接比較で比べて広狭判断ができる。 比較対象を重ねて、どちらがはみだすかで広狭の判断をする。	C-① A-①
5	はみだした部分や任意単位で測定して広狭判断ができる。 はみだした部分を比べたり任意単位で測定したりして広狭の判断をする。	B-① A-②
6	広さを任意単位で測定して広狭判断をすることができる。 適当な広さを単位として、そのいくつ分かで数値化して広狭の判断をする。	D-② A-③
7	「水のかさ」の意味を理解し、直接比較や間接比較で多少判断ができる。 片方に水を移したり、同じ大きさの容器に移したりして多少判断をする。	C-① A-①
8	水のかさを任意単位で測定して、多少判断ができる。 同じコップの何杯分かで数値化して多少判断をする。	C-② A-②
9	学んだ比較方法や測定方法を違う場面に活用できる。 自分の調べたい物の量の比較や測定を行ったり、総合的評価問題を解いたりして、学びをふり返る。	D-①③

18

2学期に実践する単元で(班ごとに相談してください)

①子どもの**学習経験**を踏まえる。

②単元を通して「**育成を目指す資質・能力**」を確認する。
(学習指導要領解説、指導書等) **到達点の明確化**

③子どもの「**思いや願い**」を引き出す手立てを考える。
(本日のメイン・・・発想する) **通過点の具体化**

④資質・能力の育成に向かうための、教科の特質に応じた学習活動を構想する。
体験と表現の相互作用 言語活動

算数的活動

※合科的, 関連的な指導

※2学期以降に実践してみる→指導の記録をとる

→次年度の指導に生かす **(学級のカリマネ)**

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (育成を目指す資質・能力)
	思いや願いを引き出す手立て		
	通過点の具体化		到達点の具体化

低学年では教科等の関連を積極的に図ること

低学年教育で、教科等の関連を図ることが大切なのには、大きく二つの理由があります。

一つ目の理由が、低学年の時期は、そうした発達の特性にあるということです。子供が、国語科や算数科の中で例えば言葉だけの世界あるいは数だけの世界に興味・関心を湧き立たせ、探究することができるようになるのは、2年生から3年生くらいにかけてなりたっていくのだと思います。各教科を学ぶための構え、単純な言葉で言えば「国語脳」「算数脳」ができあがるのが、そのぐらいの時期でしょう。

その時期までは、生活科における体験的な学びや、そこで気づいたことなどを生かして、国語科や算数科の学びをすることが大切です。低学年で、生活科との関連を図ることの重要性は、生活科ができる以前から言われてきました。しかしこれまでは、そうは言っても国語科と算数科はやっぱり独立だよ、という雰囲気も強かったのではないかと思います。

二つ目の理由は、学校で学ぶときには、理科は理科として、社会科は社会科として、学んでいるけれども、**現実世界の問題解決では、教科を超えて結び付きがある**ことです。そうであれば、低学年の時期から、教科で学ぶことと、生活や他の場で学ぶことがつながっていることを実感する経験をしてほしいほうがよいのではないのでしょうか。

現実には、教科できちんと分かれているわけではありません。教科はあくまでも、現実を捉える道具なんです。それを忘れて、「大学に入ってから現実見ましようね」とか、「いろんな教科の間もやりましようね」では、間に合わないんです。

そんなことは、30年前から分かっていました。だから生活科ができ、総合的な学習の時間ができたんです。**教科では切れない部分、あるいは教科をつながなきやいけない部分を扱い、かつ学校で学ぶことを現実世界で考えることにつなぐのが、生活科や総合的な学習の時間**なんです。

教科を大事にすることを否定しているわけではありません。今回の学習指導要領では、教科の中核的な知識、概念をしっかりと教えましようと言っています。だけどそれが同時に、「その知識は問題解決のための、知的な道具なんだよ」という読み込みをしてほしいんです。そのために、低学年では教科等の関連を積極的に図ってほしいと思います。

子供は、幼児期にさまざまな力を育んでいます。その力を生かし、さらに伸ばそうというのがスタートカリキュラムです。幼児期に近い環境を用意したり、弾力的に時間割を編成したりして、幼児期に育んだ力を、小学校でも発揮できるような工夫が求められています。